

「カミ」の源流

カミ「人間を超える力」

「カミはどややって生まれてきたのでしょうか。大昔の人にとって川は、魚などの食べ物や、暮らしに必要な水をもたらしてくれるありがたいものでした。しかし一方で、大雨が降ったあとには氾濫して人や家を呑み込んでしまふ、やっかいな存在でもありました。そこで川を、「恩恵をもたらしてくれるもの」であると同時に、「恐ろしいもの」と感じていたようです。このような相反する気持ちは、川だけでなく山や蛇、岩などいろいろなものに対して抱かれていました。たとえば近くのこんもりとした山は、木々でうっそうとしており、どこか薄気味悪いものです。しかし一方で、生活に必要な水や食料や燃料などをもたらしてくれます。大昔の人びとは、このように自分の生活に密接に関連するものに対して、恐れると同時に惹かれていきました。そしてこれらのものを、人間を超える力を持つものとして見つめていたようです。

こうした人間を超えた力を持つものは、タマヤモノと呼ばれました。ただし大昔の人びとがタマヤモノの背後に、現在私たちが神という言葉でイメージするもの、つまり「人間のような姿をした存在」がいて、考えていたかどうかはわかりません。実生活に密接に結びついているものを、ただ「力あるもの」として崇め、信仰したところに、カミの源流があると思われまふ。

古墳と祭り

日本の多くの人びとが墓造りに夢中になった時代、それが古墳時代です。古墳は、葬られた人物やその後継者、一族の富と権力のおかげです。古墳時代にはいると、畿地方の勢力を中心として、急速に日本の国がまとまりを見せはじめますが、古墳の形と大きさにその様子があらわれています。

古墳では、死者の死をいたみ、死者が安らかに死後の世界へ去るのを願つとも、カミとなって残された者を守ってもらえるよう葬・祭が行われたと考えられます。たとえば弥生時代の終りごろから古墳時代の前半にかけては、埋葬されたカミシラの甲いれを、墓の上で一族ごとして執り行ったと言われています。そのすぐあとで、後継者のカシラが亡きカシラの富と権威と霊力を余すところなく受け継ぎ、一族と地域の安定や繁栄を祈願したと想像されます。墓の上から見つかるわざと壊された多数の土器は、祭りの際、酒盛りに使われたり、お供え物を盛ったものかも知れません。

古墳時代の葬・祭



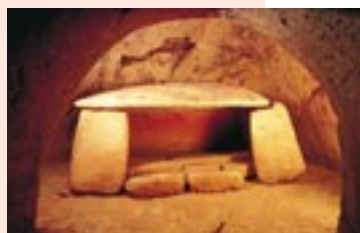
古墳(松江市岡田山1号墳)
古墳は単なる墓にとどまらず、死霊を鎮め、祖先を祀るための重要な「葬祭場」であった。



死者に副えられた玉類(松江市・岡田山1号墳、金崎古墳出土)
古墳からは、死者へ手向けられた種々の品々が出土する。死者が死後の世界で用いるためのもの、あるいは死後の世界の防魔、鎮魂を願ったものなどと考えられる。



古墳の中は黄泉の国
(出雲市・大念寺古墳横穴式石室の内部)
古墳時代の後半以後になると、死者は横穴式の石室に葬られることが多くなる。そこは真つ暗闇の、まさに死者の住む世界だ。当時の人びとの死後の世界観を垣間見ることができる。



赤い石棺
(安来市・穴神1号横穴墓の家形石棺)
死者の住まいのように家形に作られた石棺が、ベンガラ(酸化鉄の一種)で赤く塗られており、呪術的な意味を感じさせる。この石棺の前壁から、彩色の壁画が発見された。



描かれた壁画
(安来市・穴神1号横穴墓)
石棺の前壁から発見された壁画を、最新のコンピュータで画像処理をしたもの。三角形や直線、ワラビの芽吹く姿に似た図柄が見える。死者の防魔、鎮魂を祈ったものだろうか。



道具立ての復元
神木である榊の木には土製模造品がつるされ、ミニチュア土器にはカミへ捧げる供物を盛ったと考えられる。



水辺のカミ祭り道具立て(大田市・大家八反田遺跡出土)
小さな谷間の湧水地と小さな川のそばにある遺跡から、古墳以外での祭りの様子を示す珍しい資料が見つかった。川跡やそこから水を導いた溝跡付近から、古墳時代中ごろ(5世紀代)の多量の土器や、鏡や勾玉の形をした土製模造品、ミニチュア土器、桃種、鳥形木製品など、さまざまな祭祀遺物が出土した。生命の源である「水」にまつわる祭祀の場と言える。

ムラの実力者の粗霊がやがて神に

それでは、タマヤモノといったカミ的なものが、どのようにして「人間的な存在」として人びとから祀られるようになったのでしょうか。

弥生時代になり、日本に米作が導入されると、共同作業が必要とされるため、人びとは集団で定住するようになり、小さなムラがいくつも成立しはじめます。その中で共同作業を指揮できる能力を持つ者が、ムラ全体を支配する力を持つようになり、やがて彼はいくつかの田を私有し、ムラの人びとを使用するようになります。彼の



須我神社の夫婦岩(大東町須我)
現須我神社の奥宮で、神社の裏の八雲山にある。岩に神が宿るとされる。

死後もその土地は近親者に継承され、同時にムラを支配する力も継承されていきます。

このような流れの中で、いつしか力ある者は死後ムラの祖霊となり、やがて祖霊はムラの権力者の家の「祖神」となっていくまふ。「このように農耕時代にはいり、人びと



志多備神社の糞蛇(八雲村西岩坂)
神木に口を大きく開けた糞蛇が巻いてある。

のあいだで土地の「私有化」が始まるようになると、漠然と「力あるもの」として祀っていたものの中に、人格性を持つものが現れてくるのです。

こうして祀る者の生活の変化によって、祀られるものが変化していき、大昔の人びとが恐れ敬っていた「モノ」は、たとえ現在では出雲大社の祭神、大國主尊の別名とされる大物主尊となっていくのです。

カミは、「恐れけど惹かれる」といった感情の中で、それを力あるものとして信仰したところから生まれました。そしてこの「カミ」は、祀る者の変化によって「神」に変わっていったのです。しかし、神の源流である、恐れけど惹かれる」という相反する感情は、現在も地区の「荒神さん」や「大元さん」に対する気持ちの中に生きているのではないのでしょうか。